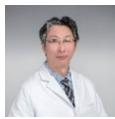
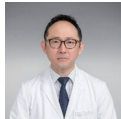


消化器癌先端治療開発学寄附講座

1. スタッフ



特任准教授 ぼぼ よしひみ
馬場 祥史

特任准教授 いわつき まさあき
岩槻 政晃

2. 診療科の特徴、診療内容

本講座は2017年10月1日に、消化器癌に対する高度な集学的治療の実践、および難治性消化器癌に対する新規治療法開発のため開設された。

(1) 手術と化学・分子標的療法、放射線療法を組み合わせた最適な集学的治療体系の確立

進行消化器癌に対して、手術、全身化学療法、分子標的薬療法、免疫療法、放射線療法などを組み合わせ、集学的治療により予後の向上に努めている。手術においては、安全性と根治性を考慮しつつ、他臓器合併切除を含む高難度手術を実践している。また進行度に応じて機能温存手術も行っている。安全性と根治性を両立した腹腔鏡・胸腔鏡手術の発展に加え、胃癌、食道癌、大腸癌に対するロボット支援手術を進めている。

進行癌に対しては、化学療法後に非治癒因子が消失した際には根治術 (conversion surgery) を積極的にを行い、予後の向上を目指している。

(2) 難治消化器癌に対する新規治療法開発に向けた基礎研究

現行の治療戦略では制御不能である腹膜播種を伴うスキルス胃癌や膵臓癌に対する新しい治療法開発を目指し、国内外の研究室や企業と連携し研究を推進している。

(3) 腸内細菌叢があたえる消化器癌への影響

腸内細菌が様々な疾患で注目を浴びている中、消化器癌において、発癌、化学療法抵抗性、免疫応答への影響について、分子生物学的なアプローチでそのメカニズムの解明を行っている。

(4) 微量癌細胞検出システムの開発

熊本大学工学部、企業との医工連携・産学連携を行い、血液中に存在する微量癌細胞の検出システムの開発を行っている。様々な特許を取得し、現在、全国レベルのコンソーシアムを確立し、臨床試験で検証している。

(5) 集学的治療に係る治験・臨床試験の遂行

食道癌、胃癌、大腸癌、GISTにおけるさまざまな治験、臨床試験を遂行し、エビデンスの確立に貢献している。とくに、近年目覚ましく発展している抗PD-1抗体療法をはじめとした免疫療法に関する治験を推進している。

(6) ガイドラインに沿った標準治療の啓蒙・普及

熊本がん診療専門医育成プログラムによる研修の推進や、セミナー・講演を行っている。

3. 診療体制

熊本大学消化器外科とともに診療活動を行っている。

4. 診療実績

令和5年度は熊本大学消化器外科とともに約900件の消化器癌手術を行った。食道癌、肝臓癌、膵臓癌手術数は、全国でもトップレベルである。

5. 高度先進的な医療の取組

低侵襲手術、ロボット支援手術の推進、さまざまな治験、臨床試験を通じた新しいエビデンスの構築を行っている。

6. 臨床試験・治験の取組

食道癌、胃癌、大腸癌、GIST、原発性・転移性肝癌、胆道癌、膵臓癌などを対象として、治験や臨床試験に積極的に参加している。またJCOG、JFMC、KSCCなど、全国規模の臨床試験に多数参加している。

7. 地域医療への貢献

消化器癌に対する集学的治療の確立のための専門医育成、横断的な組織作り、診療科を越えたcollaboration、関連病院との施設連携等を、消化器外科学教室と協力して行っている。

8. 医療人教育の取組

熊本大学消化器外科と協力して、学部学生・研修医・大学院生の臨床・研究に関する教育活動を行っている。また、海外からの留学生を広く受け入れ、国際的に活躍できる人材の育成に努めている。診療面では、臨床腫瘍医・消化器内科医・放射線科医など、診療科を越えた密接な協力体制の構築、当該診療領域の専門医の育成、地域の高度な医療管理や均一な医療を提供する体制の確立に努めている。

9. 研究活動

研究活動としては、令和5年度に英文筆頭2編、英文共著14編を出版した。主な論文は、臨床研究では、1) 消化器癌におけるLINE-1の低メチル化の重要性 (Cancer Sci)、2) LINE-1のメチル化と腸内細菌の関連性 (Esophagus)、3) Fusobacterium nucleatumと免疫応答の関連 (Br J Cancer)、4) 消化管癌におけるTextbook Outcomeの予後への影響 (Langenbecks Arch Surg.) 5) 胃癌 conversion surgery の予後規定因子の同定 (Ann Gastro Surg) が挙げられる。1) -3) はこれまでに報告がなく、新規性の高いトランスレーショナルリサーチである。4) は高齢者に対する癌治療において施設評価として重要な評価システムであり、予後への影響を明らかにした新たな研究である。5) は conversion surgery が普及したものの、依然として予後不良のグループを同定し、conversion surgery の適応をより明確にした新たな知見である。上記のようにトランスレーショナルリサーチから臨床研究まで幅広く、研究活動を行っている。